

《修士論文要旨》

青年期におけるスピリチュアリティの 具体像とその意味の検討

真 邊 彰*

【問題と目的】

スピリチュアリティ (Spirituality) とは一般的に宗教的な意識や精神性、そのような精神的・霊的次元に関わろうとする性質と考えられている。「その人にとって重要な意味を持つ何か」として、人々の健康に深く関わるものとして捉えられるようになったスピリチュアリティであるが、スピリチュアリティに対する適切な日本語訳が今のところ存在せず、結果として定義も非常に曖昧なものになりかがわしく霊能力的に捉えられることもある。

そこで本研究の目的は、第一に数量的アプローチからスピリチュアリティ的要素の関連性の多面的検討と整理から始め、その後スピリチュアリティの構成要素について探りアウトラインの明確化を試みる。そして第二に質的アプローチであるインタビューを通じてスピリチュアリティの影響や作用について検証していくことである。そして最後にスピリチュアリティとカウンセリングや心理療法との関連性について考察していく。

【方法】

数量的アプローチにおいては、価値志向性尺度（下位尺度は理論・経済・審美・宗教・権力・社会）を用いてスピリチュアリティと関係が深いと思われる宗教的価値に重点を置き他価値との関連性を見る（その際、社会的価値については質的研究において中心を占めると思われたため省いた）。その後、相関係数を鑑み因子分析を通じてスピリチュアリティの構成要素を探った。

質的アプローチにおいては、インタビューを行いその内容を録音し質的分析手法 SCAT (Steps for Coding and Theorization) で分析を進めた。その際 WHO が開発した QOL-100の「スピリチュアリティ・宗教・個人的信仰」の領域を参考にしてインタビュー項目を決定した。量的・質的ともに青年期に位置付けられる若者を対象（主に大学生）とした。

【結果】

価値志向性尺度において宗教的価値と審美的価値との間に中程度の有意な相関が見られた。そのため、宗教的価値と審美的価値を合わせて因子分析（主因子法、Varimax 回転）を繰り返したところ、＜自己向性意識＞因子、＜人生完遂＞因子、＜世界との関係＞因子、＜時間超越＞因子の4因子が抽出された。インタビュー結果から、個人のスピリチュアリティと推測できるものとして「重要な他者（家族や友人等）」、「趣味（音楽鑑賞・読書等）」、「目標」が挙げられた。

平成25年度 *社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

【考察】

宗教的価値と審美的価値の結び付きについて日本人のアニミズム的思考が関与しているように思う。そして因子分析によって抽出された因子は自身の感性や感覚の適合（自己向性意識因子）、人生を精一杯悔いが残らないようにしたい（人生完遂因子）という自己存在や実存的意味の模索に関与し、これが安定することで人々を支えているものと思われる。世界との関係因子と時間超越因子は神秘的・超自然的因子であり非日常的であると考える事ができる。

スピリチュアリティとして家族や趣味、目標が挙げられた背景には、濃密な人間関係を第一義的に捉えられており、それに加え自己の模索のために自分を重視した時間や反芻できる空間や個人特有のパーソナリティにより焦点を置き自己基準を定めることの重要性を反映しているのではないだろうか。そしてインタビュー内容を SCAT による分析を通じてスピリチュアリティの機能を大まかに推察したところ、大まかに3つに分ける事ができた。気持ちや感情を受け止めてくれる受容器 (Container)、辛く悲しい出来事に直面した際の避難所 (Shelter)、そしてアイデンティティー形成に影響する個体化 (Individuation) である。これらは重層的相補的に作用していると思われる。

スピリチュアリティの構成因子と機能についての関係であるが、自己の感性や心の方向性、及びそれらの表現は重要な他者とのコミュニケーションや趣味を通じて感じられることが多いと思われるため、自己向性意識因子と人生完遂因子と3つの機能が特に強く結びついているようである。世界との関係因子と時間超越因子は非日常的で印象的な場面に直面することで意識化されたり体験される可能性を包含しているのではないだろうか。このように考えるとスピリチュアリティは自我意識的な領域（自己向性意識・人生完遂）と自己超越的な領域（世界との関係・時間超越）の異なる次元のもので構成されているように思われる。

スピリチュアリティの機能はカウンセリングにおける機能としても捉える事ができる。しかし、カウンセラーとクライアントの関係は終結しなければならない関係でもある。カウンセリングは悩み苦しむ場としての性質も持っている。それは同時に、個人にとって成長としての変容プロセスの一過程と捉えることができる。カウンセリングは代替的スピリチュアリティ機能を持ち、そして非日常的な特性の中で自らを深く振り返るという体験は、スピリチュアリティにおける自己超越的な領域に接近可能性を増大させ、世界や自己についての深い気づきをもたらすイニシエーションの機会となり得るのかもしれない。